
萌えっ娘もんすたぁ～ある最強のトレーナーの場合～

紅魔館雑務総括

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

萌えっ娘もんすたあ～ある最強のトレーナーの場合

【Zコード】

Z7953E

【作者名】

紅魔館雑務総括

【あらすじ】

萌えっこもんすたあ・・・それは人とともに歩み、人々に雜じる存在。それは時として『ともに戦う仲間』、『愛し合ひ仲間』、『忠実な従者』となり、人に溶け込んでいた。・・・この物語は、強さを極めたトレーナーの少年と、それに従う従者、そして少年が引き取ることになったひとりの『萌えもん』の、愛と涙と時々鬱の物語・・・。

プロローグ『事のあらまし』（前書き）

考えるな・・・！

感じりつ・・・！

あ、ヒトカゲかわいいよヒトカゲ。

プロローグ『事のあらまし』

「…………僕ですけど」

着信先を見て不機嫌そうな、十台半ばの少年。

どうやらそれ以外の理由で、悲しそうである。

『ああ、また圈外かと思ったが、大丈夫だつたようだな』

漆黒に輝く『ナビゲーター』からは、初老らしき声。

それなりに気を使って陽気に振舞つてはいるが、怒りと苛立ちが見え隠れしている。

どうやら少年以外の理由で、不機嫌なようだ。

「何のようですか。これから銀山シロガネやまに行きたいんですけど。水がおいしいんで」

『レベル100の仲間に囮まれて、さぞや楽しいだろうな』

「特に愛着のない100レベのメイド達じや、いても過ハダ屈なだけで

すよ」

『傲慢だな。…………だ。』『フレイア』を失つた傷の癒えていない君に、新たなパートナーを提供しようと言つのだよ』

「…………『フレイア』の代わりなんて…………いるわけがない』

『代わりではない。また別の、パートナー。第一と考ハシえてもらつてもいい』

「厄介払いに、僕に『萌えもん』を渡そ、つてわけですか?』

『ふ、ばれたか』

「種族は?」

『ヒトカゲだ』

「・・・よつによつて、何で・・・」

『いいだう?』

「・・・・・・明日、九時に研究所に訪ねさせてもいい?』

『把握した。伝えておこつ』

「言つとくけど、メイドも連れて行くから『

『嫉妬させるなよ?』

「大丈夫だよ、忠誠心の塊みたいに育ててるから』

『違う。私が、だ・・・そのメイド達に』

「はは、そりやあ嫉妬してもらわなきやな』

『じゃあ、用件は伝えたからな』

「じゃあ、また今度』

「・・・マスター』

後ろから話を聞いていた、氷のよつて透き通つた青の少女は、心配げに声をかけた。

「嫌なら、ついてこなくていい。もし引き取つたら、数ヶ月は帰つてこられない。・・・家のメイド達には、帰つてから伝えるよ

「冷たくないが、想いはあまりこもつていなさそうな声。

「マスターのいるところは、私のいるところでござります。少なくとも私は、御供させて下さい』

「・・・システィナ・・・ありがと』

少年の声に、少し温かみが現れた。

「いいえ。私は、マスターの忠実な従者。・・・それに、マスター

一人では満足な生活を出来そうにないので・・・心配なのです』

「ツたく、もう・・・わかつてゐるじゃん。じゃあ、水を汲みに行こうかな』

踏み出した少年は、少女の手を引いていた。

「はい、マスター』

頬を少し緩め、青い少女は手を引かれるままに進んだ。

プロローグ『事のあらまし』（後書き）

どうも、今回趣向を変えて『萌えもん』やってみました。
あ、感想も残してくれると嬉しいです。
こんどから、少しずつペースを守つて投稿して行きたいと思います。

First Story: 『初心に返れ!』（前書き）

これは、まあ、『クリスタル』と『炎赤・葉緑』の類を『いちや』混ぜにしたつて考えてもらつていいです。

え？ なんで『炎赤・葉緑』なのかつて？

後からわかります。技とか特性とかありえん（笑）

というわけで、ゆつくりしていつてね！！

First Story:『初心に返れ!』

Place: 素白町オーキドの研究室 マサラタウン

この世界には、『萌えつ娘もんすたあ』・・・通称『萌えもん』と呼ばれるものがいる。

人の言葉を解し、人とともに歩む、一言で『パートナー』と称するには重すぎる存在となっていた『萌えもん』。

さまざまな動物達を『擬人化』したような姿を持つていて、よほど特徴でない限り、衣服の着換えが可能らしい。

時には友、時には恋人、時には妻、時には従者、時には主人として、『萌えもん』は人の隣で・・・いや、人々の中で存在し続いている。

そう、彼らもまた

。

「どうも。ノリアキさん」

「オーキド博士と呼べ、ミナト」

「はいはい、オーキド博士」

少年の名は、ミナト・・・漢字にすると『湊』。

フルネームを『風凪 かなぎ 湊』と言つ。

目の前にいる初老の白衣の男は、『オーキド ノリアキ』・・・漢字で『大城戸 朔明』と書く。

「おお？ その子がお前のメイドか？」

「ちょっと、そんなに視姦しないの。僕のお気に入りなんだから」「ま、マスター・・・」

「なつ、ミナート！」

後ろにいる青い姿の少女を、ミナートは手でかばつた。

彼女の名は『システムイナ』。『萌えもん』の従者・・・種族は『スイクン』、伝説級の『萌えもん』・・・世界にただ一人の『萌えもん』なのだ。

「チャンピオンを倒したにも拘らず、いろいろな場所をふらついて、どこにあるかわからん家に住んで、何かを求めて進み続ける・・・全く、何なんだお前は」

「いまさら何を。もう今年で三年目・・・メイドは全員レベル100になつたし」

「なあ、誰だ？」

現れたのは、幼い少女。赤毛に赤い目、オレンジ色の服。

「・・・マスターになんて口を・・・斬る！」

システムイナが手に氷を作り、少女に突つかかる。

「システムイナ、ストップ！」

「つ！・・・了解」

それをミナトは静止、システムイナは従つた。

「さて、君がヒトカゲ・・・だね？」

ミナトが歩み寄り、手を差し伸べる。

「触んなボケ！」

パン、と手を少女ははじいた。

「私にはな、『ティア・アトカーシャ』つていう立派な名前があるんだ！」

「・・・それは失礼、ミス・アトカーシャ。・・・オー・キド博士、この子がどうかしたのかい？」

「それがね、もう自由奔放・傍若無人・・・私の手には負えないんだ。この子を、引き取つてはくれまいか？」

「どうかなあ・・・引き取つて、後悔するような真似はしたくない

「どうかなあ・・・引き取つて、後悔するような真似はしたくない

し・・・

「オー・キド！ 私もこいつと組むのは嫌だ！」

「じゃあ、ずっとここにいるか？」

「く・・・・卑劣な・・・」

「・・・・・ミス・アトカーシャ。少し教えて欲しいんだけど、ちよつと来てくれる？」

「なんだ？」

『ティア』と名乗ったヒトカゲの少女は、先ほどとはうつて変わつてひよいひよい近付いた。

ミナトは耳打ちの体制に入り、

「ねえ、ひよつとして、オー・キド博士に酷い事されてない？」

「！」

それを聞いた瞬間、ティアは眼を見開いた。

そして一度、瞬きをして元に戻し、

「・・・・されて、ない・・・」

と呟いた。

「今は、オー・キド博士は聞いてないよ。だから、ほんとの事を言つてもいいから」

とん、と頭に手を置き、ミナトは囁いた。

「・・・・・・」

少し顔色に陰が生まれる。

「ねえ、何か、博士にされたんじゃない？ 彼、変態ロリコンの氣があるから・・・」

「お前は」

「・・・・？」

「お前は、私を、裏切らないな？」

声が震えている。何か、恐れていよいような声・・・。

それにはかを感じたミナトは、

「・・・僕と共に来るのなら、君に誓つて裏切らない」

精一杯の誠意を込め、ミナトは、ティアの耳元で告げた。

「…………」

次の瞬間、ティアは腕で、ミナトの首に抱きついていた。

「頼む……私を、ここから出して……」

「わかった。……システム！』

「御意」

ミナトの合図で、システムがどこかへ霧散した。

「オーキド博士。この子は、僕が引き取らせていただきます

「そ、そ、うか……あ、りがとう」

「あと、婦女暴行罪と、萌えもんを性の捌け口として利用した罪で、警察に連絡しておきましたよ」

「……何のことだ！？」

「わからないわけでもないでしょう。あなたが、この子に良からぬ事をしたのは聞きましたよ」

「な、な、な、誤解だ、ティア、お前には何も……」

「嘘つくな！ 私に、やらしい手つきで傷薬を塗つていただろう！」

それに、それに

「！」

ミナトは、それをみて「それ以上は言えない」のだと理解し、抱きかかえて頭を撫でた。

「・・・何だと？ 貴様、主人の私に

「今の主人は、僕だよ」

「く・・・『萌えもんの揉め事は、萌えもんバトルで』……結局

だが、ルールに従うしかないわけか」

オーキドは一步後退し、そのポケットに入っていた『もんすたあぼーる』を取り出す。

「く・・・そちらは一体、こちらは六体、勝負は見えてるわ！」

「・・・・・いま、お前何て言った？！」

「勝負は見えてる・・・と言ったのだ！」

「違う！ お前、『萌えもん』を『体』で数えたな？！」

「ふん、所詮は動物と変わらん。そいつは人間でない！」

『萌えもん』を『体』で数える』ことは即ち、

『フレイア』への侮辱に等しい！ その愚かな考へ、この場で叩き伏してやる！』

「何だと、できるものならやつてみろ！ 『エーフィ』！」 繰り出した萌えもんは、白く輝く美しい尾や耳、装いを持つ少女。擬人猫のような見た目である。

「博士！ ・・・な、何をすればいいんですか・・・私・・・」

オーキドを見たとたんに、びくつと恐れの様子を見せる。

「あのガキを、ぶつ飛ばしてやれ！」

「は、はい、わかりましたあ！」

「つたく、萌えもん同士の決闘にも拘らず、トレーナー狙いとは・・・ルール違反も甚だしいよ

システィナ！」

「了解、マスター！」

その手でオーキドとエーフィを指し、戦闘の皮切り。

「吹雪、オーロラビーム！」

「はあああああ

！」

まずは、その場に吹雪を錯覚する寒気を作り出し、轟々と風を舞わす。

そしてその後、エーフィに向かつて凍りつくような極光を放つた。

「レベル100、最大威力4294836225（42億9483万6225）・・・256進法式萌えもんステータス表示法則に置いて、二桁目の上限・・・『技威力』65535と『特殊攻撃』65535の乗算の積が、この技の威力！ いかなる防御も、この攻撃の前にはひれ伏すだろうね・・・といつても、そんなのはほとんど運任せ。普段のステータスで言うなら、一種類の基本技威力の平均152と普段のシステムの特殊攻撃120の積、18240が普通。あ、これが直接『耐久力（いわゆるHP）』に換算されるわけじゃないんだけど・・・まあ、軽く見積もってもエーフィは倒れるだろうね・・・そのほかにもいろいろめんどくさい計算はあるけど、どうでもいいや

轟々と解説を終えて、寒さに少し震えを覚えていると、

「おー、寒いぞ・・・」

すぐ足元で、炎タイプの少女はかちかちと歯を鳴らしていた。

「あ、ごめんごめん・・・ミス・アトカーシャ」

「何だ。早くなんとかしろ」

「・・・抱きしめるくらいしかないんだけど、暖める方法が」

ミナトは、眼をそらして呟いた。

「なつ、なななななななななな?！」

既にミナトの腕から降りてているティア、派手に身じろぐ。

「?！」

システムイナも動搖した様子。

「そんな、貴様、レディを抱きしめるなどと、そんな、破廉恥な真似・・・！」

「そ、そそ、そうですよマスター！ 仮にも、この子は淑女の一人、

そうそう抱きしめるなどという行為に走つては・・・」

「ま、まあ、このまま死なれても・・・」

「!-!-」

何かに反応したように、ティアが歩み寄つてきた。

そして、足にしがみついた。

「・・・いいぞ」

「?」

「・・・つ抱きしめても・・・その・・・構わない」

「え？ いいの？ その・・・ミス・アトカーシャが」

「うん・・・まあ、その・・・死ぬのは、嫌だからな・・・こんなところで」

(このガキイイイイイ！ よくもマスターにそんなことをおおおお

おおー！)

「・・・どうした、早く」

寒さに耐えかねたのか、急かした。

「わ、わかった・・・」

そしてそつと、ティアを抱き上げて、胸元で抱えた。

（心臓があるから、きっと体温はそれなりに高いはず）

「寒いぞ、もつと強く」

「え？！」

聞こえなかつたのか。もつと強く抱きしめる、と言つてゐるんだ

「！」

「異論は認めない。私が寒くて死んでもいいのか?」

・・・・・
「むう」

最後に少し呻きを漏らしてから、少し強く抱えてみた。

冷たし豚か首元に当たって

闘争が終結を喜ぶ、
テイア。

「 」

新編 本居宣長全集 第二卷

「うう、尊二天、うう、うう、ハリトニハ、ハラ

日世ニ和キニ 鳥目アカヒニ

「つたぐ、使えん猫だ……」

ボールの中にしまいこむと、

「行くぞ・・・ハガネール！」

「止めておいたまつがいいと思つ

「な・・・・なぜ止める…！」

「今のシステムと、お前の

「さあ、諦めて降参したほうがが身の為だよ」

念のため、システィナが氷の刃を作り出して、ミナトを護つてい

○○○

「どうした、メンヘラにでもなつたか」

「一ノナミ」

「なつ？！」

「ふは、ははは・・・・・・・・・・はあ」と笑い終えたオーキドは、ミナトの腕に抱かれているティアに、話しかけた。

「・・・で、どうだった？ ミナトは。かなり、合格ラインいつて

たわう」

「まあ、さうだな・・・100点満点中、78点と言つたといふのだ。

合格

「・・・え、何のこと？ はなしが りかい できない ・・・。

」

「はいはい、赤版風に言わなくていいから、教えてやる」

「まず、私が『手に負えぬ』とオーキドが言つたのは本当だ。そして・・・」

システィナが、次の言葉を『予想』として繋いだ。

「恐らく、『私と共に往くに相応しい者を連れてこ』とでも言つたんでしょう？」

「ビンゴ。そこで私は、三年ほど通話の繋がらなかつたミナトを、提案したのだ。で、ティアが興味を示した、と言うわけだ」

「さつきお前は、『私に誓つて、裏切らぬ』と言つたな？ もしその言葉に、『今も』偽りがないなら、私を連れて、再び旅をしないか？ 私は、生まれてこの方、『もえもんばとる』と言うのをしたことがない。それは楽しいというが、私にも教えてはくれないか？『今も』とは、そうでなければ連れて行かなくてもいい、と言つことだつた。

「・・・マスター。やはり、我々は・・・」

「この一人の手の上で踊らされていたみたいだね。・・・いいよ、ミス・アトカーシャ。連れてつたげる。決闘の楽しさを知らないなんて、勿体無を過ぎるからや」

「・・・そ、そつか ！」

安堵したように、ティアはミナトに身を預けた。

「あ、そうだ。お前の名を聞いてなかつたな」

「僕？ 僕は、何度もオーキド博士が呼んでるけど、ミナト。フル

「ネームは・・・『風凧 漢』。よろしく、ミス・アトカーシャ」

「・・・てい、ティアでいいぞ・・・／／／」

少し、赤くなつてゐるようだが、ミナトからは今、見えない。(このガキめ・・・いつちょっと間にテレやがつて・・・！)

殺氣全開のシスティナ。

「ど、どうしたのシスティナ」

「・・・いいえ、何でもありませんマスター」

「そう・・・？ なら、いいけど・・・」

「で、お前に言いたい事が一つあるー。」

「な、何だいオーキド博士」

「『初心に返れ』！」

「は、はあ・・・？」

「もう一度始めからジムやラリーニングを行き直して、精神を鍛えてこい！」

「まあ、ミス・・・じゃなかつたティアがいるから、その積もりだけど・・・」

「じゃあ、早速行くぞ、ミナト！」

ひょい、とミナトから飛び降り、一番乗りと言わんばかりに走り出す。

「ほり、ついてこい、ミナト！」

「如何致しましょう、マスター」

「そうだねえ・・・とりあえず、パソコン借りるよ」

「ん？ 何に使うんだ？」

「ベ・イ・・・・・・じゃなくて今の物価レートだよ。最近、傷薬とか買ってないし、全部寝かせたり休ませたりしてたからさ」

「なるほど。回復は全て天然の『美味しい水』というわけか

「そうそう」

三十分の後・・・

「マスター、そろそろ出かけませんと日暮れに間に合ひませんが」「どうした？ 物の値段でも調べているのか？」

「やうだよ。でもまあもう終わつたし、とりあえず最寄の街・・・」「ここにはセンターがないから、常葉町かな・・・？ 自転車よし、マップ確認よし。・・・行こうか、一人ともー。」

「おー！」

赤の少女は拳を空へかざし、少年に肩車していく。

「はいっ」

青の少女は一步後ろをついて歩き始めた。

B e N e x t S t o r y :

T O

ありがとうございます!

いや、こんな駄文に付き合っていただけたのはお恥ずかしい。次回、トキワシティ。適当にアイテムを買いやひえで、『鬼畜』やんの暗いトキワの森 (ライトあつ)を行きますので、またお付合いください!

ども。

今回は、トキワシティ手前の草むらで戦ひかやいます。
そしてなんなじ都合アイテム登場しちゃいます。
では、ゆっくりしてこつこつ

Second story:『じるべき場所の大切さ』

Place: 常葉町トキワの森

素白町を出発したミナトとティア、システィナは無事、日暮れ前に『萌えもんせんたあ』にたどり着くことができた。

「どうせ」

「あら、ミナトさん、久しぶり。元気してた?」

流石にチャンピオンを倒して一人、いろいろほほつつき歩いていたら有名にもなる。

常葉町萌えもんせんたあのフロント担当も、その例に漏れず。

「ええ、おかげさまで」

「で、もう日が暮れちゃつし、萌えもん達もそれなりに疲労してるでしょ?」

「まあ、それは仕方ないというか・・・お願いです泊まらせてください」

「お願いされなくても』萌えもんまいすたあ』なら、喜んで泊めちゃうわよ」

「ま、まいすたあ?」

「知らないの? 貴方、家にいる萌えもん達を、みんなレバ100にしちゃつたんでしょ? だから、みんなから『萌えもんまいすたあ』って呼ばれてるのよ」

「そ、そなんですか・・・」

「意外とすごいんだな、ミナト。見直したぞ」

腰程度の低い位置から、ティアはミナトのジーンズを掴んでいる。

「まさか、マスターがそんな風に呼ばれていたなんて・・・予想も遠く及びませんでした」

後ろで、システィナはミナトの手を繋ぎたそうにしている。

「えっと・・・」の廊下をまっすぐ進んで・・・五つ目の部屋以降

が空いてるわ。それじゃ、私はシフトだから

「あ、どうも」

軽く挨拶し、ミナトは置くの部屋に入つて行つた。

「駄目だつて！ ティア、いくら久々の旅だからって、はしゃがな
いの！」

「いいだろ別に！ 萌えもんせんたあに泊まるのは初めてなんだか
らな！」

「マスターに迷惑をかけられては、私のついてきた意味がない。さ
あ、おとなしく寝て」

ぴょんぴょんとベッドで撥ねるティア。

それを、ミナトとシスティナが諭す。

しかし、一向に止めないティアにミナトは痺れを切らし、
「はあ・・・もう、しじうがない。ティア、こつち来て
ミナトは、自分のほうに呼ぶ。

「ん？ 何だ、ミナト」

少し怪しみながら、ティアは近付いて行つた。
と、唐突に

「むぎゅ

「？？？？！――！」

「はつ？！」

ミナトが、ティアを抱き寄せた。

その直後、ティアは顔を真っ赤にし、システィナはミナトに振り返
つた体制のまま硬直した。

「は、離せ！ 離せ離せ離せ！ 無礼者があ！」

「マスター、どうしたんですか、幼女趣味にでも田観めましたか？
！」

「いや、そうじゃなくて。・・・ティア、『ちやんと寝る』って約
束しないと、離してあげないよ？」

「ひ、卑怯者おおお！」

「ほら、そもそもないと……僕に抱っこされたまま寝る」とになるけどなあ……？」

「ななななななっ？！」

「どうするの？ 一人で寝る？ それとも、一緒に恥ずかしい思いをしながら寝る？」

「うううううううう……」

「マスター。ティアが拗ねきらないうちに、離してあげたほうがいいかと……」

「そ、そろかな……？ わかったよ、人の心を感じ取ることに長けた君が言うんだから、仕方ないかな」

ぱつ、と手を離し、ティアの拘束をといた。

「ごめん。ちょっと意地悪しすぎた」

その手でティアの頭を優しく撫で、機嫌をとる。

しかし、その場で固まつたままのティアに少し疑問を抱き、少しミナトはティアの顔を覗きこむ事にした。

「ど、どうしたの、ティア？」

「……（きゅつ）」

ミナトの手をとり、再びその身に腕を乗せたティア。

その顔は、今まで見たこともないほどの赤面だった。少し、涙が見えているのは気の所為か。

「その……つ、えと……い……一緒に……寝ても……

ぶつぶつ

「ん？」

「い、一緒に……ああもう、何度も言わせるなっ！」

だん、とティアはミナトを押し倒す。

「なっ？！」

いくらサイズが幼児でも、その腕力は人を遙かに凌駕する。

「どうしてもと言つなら、お前と一緒に寝てやつてもいいぞー！」

上に乗つたまま、物凄く上から目線で言い放つた。

顔こそ涼しそうなシステムティアは、許可さえもらえたなら恐らくティア

を刺し殺していくやうだ。

(このガキが・・・ませやがつて畜生・・・)

「い、いや、その・・・僕は・・・」

「一緒に寝て欲しいんだろうーーー?」

ティアのその強烈な目線に押されているミナト。

「え、えっとねえ・・・」

「なあ、うなんだろーーー?！」

僅かに、頬を伝うそれを見た瞬間、ミナトはいろいろと理解。

「・・・・・・ん。一緒にでもいいよ」

「はあ・・・」

安堵の溜息を、ティアは静かに漏らす。

一気に気抜けしたのか、ぱたりと倒れたままのミナトに身を預けてしまった。

「マスター、よろしかつたので?」

「え? まあ、うん。この子は、多分まだ、母親とわかれた頃とそ
う変わつてないみたい」

「そう、ですか・・・」

「そうでなきや、こんな可愛い寝顔は、見られないつて
すうすうと寝息を立てているティアを、ミナトは撫でた。
(ずっと、何も出来なくて、寂しかったんぢゃないかな
?)

次の朝、陽光に目覚めたミナトは、

「ん~・・・ん?」

伸びをしようとした瞬間、腕にしがみつく小さなモノがいた。

それは、むにゅむにゅと袖に食いつき、強く掴んで離さうとしない。

「・・・・・・」

それが何か理解するのに、数十秒かかった。

(あ、ティア、僕のベッドで寝ただっけ・・・)

「ミナト……」

寝言で、自分の名を呼ばれたのが、少し恥ずかしいミナトは、手を離させようと少し動いてみた。

「んん……う」

だがそれが仇になり、より強く掴まれることになった。

「か、勘弁して欲しいよ……えっと、今の時間は……」黒の『ナビゲーター』をどこからか取り出し、時間を確認した。
「えっと……八時十七分……まあ、もうちょっと寝かせててもいいか」

九時も近くなる頃、ミナトはティアの腕をとんとん、と軽く叩き、起こす。

(強く揺すられて起^じされると、その口は気分最悪だからなあ……)

「ティア、朝なんだけど」

「んう……もうちょっと寝かせり……」

「……システィナ、起きてる?」

「はい、マスター。今日の^じ予定は、如何致しましょ^う?」

「……とりあえず、どれくらいかわかんないけど、できるだけ『トキワの森』に潜つてみるつもり。ティアのレベルも知らなくちゃいけないし」

「『メータ』はまだ完成品ではないのですが……」

「大丈夫大丈夫。粗方のレベルがわかれればそれでいいし。……ティア、起きて起きて。野生の子と『バトル』するよ」

「ええ……わかった……」

腕を離し、起き上がる。

「……！」

何かに驚いたのか、ティアはミナトに強烈な足蹴りを食らわせた。

「がはあっ！－！」

「ま、マスター、大丈夫ですか？－！」

壁に吹つ飛ぶミナト、それに駆けつけるシステムイナ。

「お、おまえ、何で私のベッドに・・・」

「いや、それは、ティアが一緒に寝てもいいって言ったから・・・」

「！」

「そっ、そっだつたか？」

「そつよー、覚えてないからつて、マスターを蹴つて・・・全くー！」

壁に当たつたミナトの背中をシステムイナはさすつている。

「いつつ・・・じゃあ、荷物を纏めてシヨシブにでも行かなくちゃ。『傷薬』のカートリッジはずいぶん前に切らしたし、『全治』は・・・

・よし、九十九回分ある」

「『全治』？　ずいぶんと豪気な治療アイテムだな。それなのに『回復薬』はないのか？」

「あれは・・・カートリッジの最大収納数が二十だからちょっと使い勝手が悪いんだよね」

「私もいまだに回復は『美味しい水』です」

「と言うか、さつきから『カートリッジ』つて何だ？」

「えつと・・・簡単に言えば、『何度も使える』ようでできる充填式の薬剤投与装置』つてとこりうかな？　ほひ、ここのはからこりうつて・・・」

普通の傷薬の投与口を『カートリッジ』と呼ばれた部分の小さな穴にある。

そして、普通の傷薬のトライガーリードを引いた。

ふしゅう、と音がして、『カートリッジ』の横についているカウントアーチが一つ増えた。

「これで、『カートリッジ』に一回充填。・・・でもまあ、いちいち普通のを買わなくても、頼んだら普通のより割と安価で充填してくれるよ。ケースついてないから普段より少し安いんだ」

ミナトは、ガラガラといろいろな『カートリッジ』を取り出した。『必中』、『麻痺治し』、『クリティカル』、『不思議な液』（不思議な飴の類）・・・その他諸々。

「必要なのは・・・『麻痺治し』、『毒消し』、『傷薬』、あと僕の『美味しい水』。ふふ、こればっかりはボトルでないとね」
150ml程度のボトルを、ボトルホルダーに入れて、リュックに掛けた。

「あー、羨ましいぞ、ミナト！ 私にも天然モノの『美味しい水』を寄越せ！」

「駄あー目。もうストックがあんまりないんだから」

「むうー！ 寄越せよおー！」

「・・・・もう、ちょっとだけだからね？」

「わーい！」

両手を挙げて、嬉しそうに笑う。

ミナトはリュックからコップを取り出し、2L程度のボトルから注ぐ。

「はい・・・あ、システィナ、いる？」

「いいえ、私は自分のがありますので」

と言い、システィナは自らの青いボトルホルダー（保冷専用）を、ウェストポーチに引っ掛けた。

「あー！ 私もボトルホルダー欲しいー！・・・んく、んく」
駄目、ボトルホルダーは『虹寶虫^{タマムシ}』か『貴金^{コガネ}』のデパートしかないんだから

「ちつ、それじゃあ仕方ないな」

コップを返し、ティアは少し残念そうに呟いた。

「えっと・・・とりあえず、ショッピングに行こうか

場所はかわって、常葉町フレンドドリイショッピングモール

「ども。あの・・・『毒消し』と『傷薬』と『麻痺治し』の充填、お願いします」

そう言つて、トリガーから『カートリッジ』を抜いて、店員に手渡した。

「あ、はい。少々お待ちください」

そして一分程度の後、裏から店員が『カートリッジ』を持ってきた。

「『まいすたあ』さん、支払いは……」

「『萌えもんリーグ所属者預金』の『風凧 漆』に。今日はあまり、

手持ちがないんで」

「恐まりました。……ありがとうございました、またのお越しをお待ちしております」

「それじゃあ、ちょっとレベルを見に『一一番道路』でも行こうか

「おー！」

「とりあえず……ねえティア、君は『火の粉』使える?」

「い、いいや……」

「そう。だったら……システィナ、やつてー」

「御意」

システィナは、氷の刃を作り出し、草叢くさぶへとおもむろに歩き出す。

それをなにやら怪しみながら、ティアがミナトに、

「なあ、ひょっとして、草叢を減らすつもりじゃ……」

「そうだけど。どうかしたの?」

「お前は……」

そこまで言つて、一度言葉を切り、深呼吸。

「お前は、恥を知らないのか!!」

「つ!? な、何で?」

怒つている様子のティア。その原因がわからず、ミナトは困惑つている。

「萌えもんにとつて、草叢は家も同然……いや、家そのものだ! それを貴様、切り落つてしまおうなどと……」の馬鹿が!」

「えつ? あ……」

少し、気付いてきたようだ。

ティアの言動の、真意に。

「お前は、自分の家を焼かれても、悲しくないか?!. 辛くないか

?!. お前のやつてるのは、それと同じことなんだぞ!..」

そう。

守ってくれた親もなく。
居場所だった家もなく。

ただ、道路を、洞窟を、逃げ惑つていた彼女は、知っている。
いるべき場所の、大切さを。

自分の居場所の、尊さを。

だから、彼女は赤の他人の為に、ここまで怒る事ができるのだ。
自分と重ねてしまふから。

どうしようもなく、重なつてしまふから。

そんな風に思える彼女の心に、その輝きに、ミナトは何かを見出しついてさせたのだと。

「・・・・・そう、だよね・・・僕、何か勘違いしてた。野生の萌えもんは、ただ狩られるだけの標的に過ぎない、って・・・そんな風に思つてた・・・違うんだよね。萌えもんだって、僕らと同じ、意思を、心を持つてる、生き物なんだもんね・・・」

「わかったか？！ あいつらも、ただ遊びで戦つてる奴らだけじゃない、もっと重い理由で戦つてるかもしれない・・・だから、そんなこともう一度とするなよ！？」

「・・・・・うん、わかった。そんな風に言われたら、こんなことできなくなっちゃつた。・・・さ、システイナ。取り合えず、入つてみようよ

背の高い草を搔き分け、入つていく。

ティアは、見失わないように背中に負ぶつている。

「えつと・・・誰かいないかなあ・・・」

「隙ありイイイイ！」

「つ？！」

ミナトに、野生の『キヤタピー』が襲い掛かってきた。

緑の髪、虫を模した服。確実に『むし／くさ』タイプの萌えもん。

「おつと、危ない危ない・・・つティア！』引つ搔く！

「！」

「了解、ミナト……つらあ！」

萌えもんの『引っ搔く』……発動中に限り、爪を鋭く、堅くて思い切り相手の身体を引っ搔く技で、その威力は普通の人人がミニカッターを持つた程度の戦闘力を持つ。

「ぐう……！ そう来るのなら……つ

！」

「つく……力が……はいらない……」

人には聞こえない音域の『鳴き声』……それは萌えもんの耳に届くと、筋肉の収縮信号の伝達が弱くなる作用を持ち、突発的な運動である『攻撃』の効果を下げる能力を持つ。

と同時に、急激な攻撃をかわすことが困難になる、といつ一次効果も持つ。

「ふふ、かわせまい……はあ！」

キヤタピーが、肩から思い切りタックルをかましてくる。俗に言う『体当たり』と言う奴だ。

「く……」

モロに喰らつて、草叢を無様に転がるティア。

「だ、大丈夫？！」

「ああ……なんとか、な。だが、それなりにキツイ……力が入らんのだからな」

「く……『鳴き声』対策はしてなかつたな……」

「マスター、『イヤーカバー』は渡してないんですか？」

「渡してたらこんなことにはなつてないって……あ、あれ？」

『メータ』をみていたミナトは、何かに驚いた。

「どうなさつたんですか？」

「ほり、見て。この、攻撃力の数値……」

「跳ね上がつてますね……攻撃させたら、どうなるんでしょうか

「よし……ティア、もつかい『引っ搔く』出来る？！」

「ふん……出来んわけが、ないだろう……！」

「そんな身体で、どうやって『引っ搔く』つもり？！」

「・・・『素早さ』の数値は、通常のヒトカゲビリウガ、『リザード』すら上回っている・・・それを利用して・・・ティア、後ろに回つこんで…」

「了解、任せとけミナト！」

たん、と草叢の陰に消え、キヤタピーの前から姿を消す。
「どこに消えた？！」

背後から、思い切りの『引っ搔く』。

渾身を込めた那一撃は、キヤタピーの急所を捉えた。

「つか、は・・・！」

「思い知ったか、馬鹿め・・・！」

俯けに倒れたキヤタピー。

目を回して、気絶している。

「で、ミナト。私は、どれくらい強いんだ？！」

「その前に、この子をなんとかしないと・・・そだ、『木の実』が確か・・・」

ミナトは、キヤタピーに『木の実』を食べさせる。

「んんっ・・・はっ！ お、お前、どうして・・・」

「いや、だつて、倒れてる萌えもんを助けるのは、人の性だし」

「でも、お前が倒したんでしょ？！」

「いや別に・・・『めん』『めん』、僕が倒した。まあ、ほら、倒れたままにするのも、なんか嫌じゃない？ だからさ、まあ、理由なんて聞かないで」

「・・・覚えてろよ！ 絶対に仕返してやるからな

そう言つてキヤタピーは、どこかに消えていった・・・。

「で、どうなんだ！」

「んとね・・・」⁶ さつきのレベルアップしたみたいだ
ね

「実感はないがな」

「そう言つものなんだよ、レベルつてのは・・・えつと、一番メジャーな囁り方で言つと、・・・HP 42、『鳴き声』PP 20、『

引っ搔く』PP18、『攻撃』14・・・あれ、さっきまで25だつたのに。まあ、いいか。『防御』12、『素早さ』36・・・ぶつ飛んだ数字だね。『特殊攻撃』12、『特殊防御』17・・・つてところかな。標準よりちょっと高いくらいだね』

「そうなのか？　まあ、LV5じゃ仕方ないか・・・」

自分の腕をさすりつつ、ティアは呟いた。

「えっとね、あと萌えもんには種族によつて『特性』つてのがあつて、何らかの効果が戦闘中に現れるんだ。えつと、ティアの『特性』は・・・『撃たれ火』？　えつと、ノーマルタイプと炎タイプの攻撃を受けると、攻撃力が爆発的に上昇・・・原因はこれが『ほう・・・すごいな、その『撃たれ火』と言つ奴は『聞いたことない特性ですね・・・』

「そう言えば、昨日から、何も、食べて、なかつ、た

ティアが、倒れた。

「てい、ティア？！　ああ、そうだつた！　昨日は昼食だけで夕食を食べてなかつた！　と、とりあえずどこか食堂・・・つて『虹宝シシティ』とか『浅葱市』くらいしかなかつたし・・・どーしよ？！　『マスター落ち着いて！　とりあえず今は『萌えもん携帯食糧』を・・・

「そ、そつか。えつと・・・携帯食糧の『キヤリングボール』は・・・」

と言い、『萌えもん携帯食糧』とテープの張られた白いボールを取り出し、縁にあるロツクを解除。

そこから、青白い閃光が奔り、茶色い段ボール箱が現れた。

「えつと、幼生萌えもんの携帯食糧は・・・

「これでは？」

システムが箱から袋を一つ取り出し、ミナトに手渡した。

「あ、それそれ。・・・とりあえず、ティアが起きてから、食べさ

せぬよじてよつか

「そうですね

「とりあえず街に戻らないと・・・」

B e N e x t S t o r y :

◀◀ T O

Second story:『心のべき場所の大切さ』（後書き）

ここまで読んでくれた貴方に感謝。
で、感想も残してくれると。
それでは皆さん、次のお話をまでたよつなり。

Third Story: 『影の森・前編』(前書き)

すみません、ペースを守れてない上にちょっと短くなつました。
今回は一部編成にします。
後篇は、もうちょっと長くしたいなあ・・・と思ひます。
それでは、ゆっくりしてじつてね!!

Place: 『トキワの森』

「うつわあー、何でこんな暗いわけ・・・？」

「最近、隣の道路の段差がなくなり、両道開通したおかげで、この森はほとんど管理者がいなくなり、かなり閑散としているようですよ。ほら、後ろの窓を見てください」

「んん？ なんだ？」

一同が振り返ると・・・そこには。

「わ、気持ちわるう！」

「・・・なんだあれ？」

「完全野生化したむし萌えもん・くさ萌えもんです。今やあれは、ただの動物や虫と同じ程度の感情しか・・・」

大量の緑の何かが群がっていた。

システムが言うには、人に触れていなかつた萌えもんは、理性や言葉、拳句には人に対する手加減もなくなるそうだ。

「えつと・・・もうちょっと進んでから、話を始めようか？」

「そ・・・そうですね、『フラッシュ』を覚えた萌えもんは今のところいませんから」

「そうなのか？ ジやあ、行こつか」

ティアは、オーキドの研究室にいた頃から、本をよく読み、それなりの知識は備えているらしい。

それは、その辺の『虫捕り小僧』や『ミニスカート』を凌駕する程度、だそうだ。

そして・・・突然、

ドンッ！

何かにティアがぶつかった。

「わあ！」

「とつ、とつ、と。大丈夫？ ティア」「な、何か大きい物に当たつて・・・」

「ひやあ！」

「わああ！」

ミナト、後ろから来た何かにぶつかつて倒れる。

「いてて・・・だ、誰？ まさか野生？」

「さつきぶつかつたのはティアで、今のは私です・・・てい、ティア？！」

「どーー？！」

「こいだ、馬鹿」

ティアは、ミナトの袖を掴んでいるようだ。

「そ・・・それにしても・・・システム、ちょっと重い・・・でもまあ、萌えもんは人と違う器官を持ち合わせてるから、仕方ないか・・・」「も、申し訳ありません、マスター・・・今どきますから・・・」「あ、じゃあ、僕の横に。また、姿が確認できなくなるといけないから」

「はい、承知しました」

と言つて、システムはミナトの横に避け、ミナトは立ち上がった。「じゃあ、そろそろ懐中電灯を・・・」「持つてるんなら早くつけるボケ」「まあまあ、そう言わずに・・・」

かちりと音がして、黒の懐中電灯は、ほんのり赤く、遠くまで届くように、かつ明るく見えるように彩度を調節された光を放つた。だが、それが、甘かつた。

「！」

それを聴いた瞬間、ティアとシステムはペタン、と腰を抜かした。

「あ・・・」

「だつ・・・だ・・・め・・・力が・・・」

「く・・・『鳴き声』を集団で・・・！ 萌えもんバトルじゃないよ、『んなの！』

ざつ、と草を搔き分ける音がミナトの耳に入り、斜め横に光をあてる。

「『ラッタ！』

鼠に似た耳を頭に乗せ、紫の装いを持つ小さな萌えもん『コラッタ』が、ミナトに襲い掛かる。

「ちいっ！」

飛びかかる『ラッタ』を、ミナトは足蹴りで横に。

「ちよつと見劣りするけど・・・！」

リュックから、一つのイヤホンに似た何かを取り出し、それに何かデバイスのようなものをつけて、システィナとティアに渡した。

「耳につけて！ ノイズキャンセラーと『鳴き声』の異常をある程度治すよ！」としてあるから！』

「わ・・・わかつ・・・」

なんとか二人はそれを耳につけると、流れてくる音楽に驚愕。

「も・・・萌えもんの笛・・・！」

「なんだか・・・気分がよくなつて来た！ 何だこれは？」

『ラジオ・萌えもんの笛』。カントーでしか流れてないんだけど、昔使つてた『萌えもんギア』が役に立つとは・・・立つて！ 次が来る前に逃げるよ！』

「わ、わかりましたマスター！」

ライトを消すと、互いがどこにいるかわからなくなる』の暗がりに、三人は走っていた。

しかし照らしたところからどんどん野生の萌えもんは増加するばかり。

出口を見つけたはいいが、そこにも野生の萌えもんはいた。

そして鼠算方式に増えていく萌えもん達。

「く・・・ティア、肩車！」

「わ、わかった！」

「システム、手を！」

「は、はいっ！」

ティアが、ミナトの頭に飛び乗り、システムは手を繋ぐ。

「しつかり、掴まつて・・・懐中電灯、消すよー！」

力チリ。

ボタンが押され、光が消える。

「ま、マスター！」

「手を離さないでよ？！ 一気に走りぬけるからー！」

「了解しました！」

それからどの位走ったろう。

しばらく追撃を逃れ、いい感じに四本の木が正方形の形をとつている場所についた。

そこでミナトは、よつやかく薄暗いライトをつけることができた。

「はあ・・・はあ・・・」ここまで、来れば・・・」

「だ、大丈夫・・・だと・・・」

「なあ、ミナト・・・『蚊帳』の、類とか・・・あるか・・・？」

「か、蚊帳・・・？ ああ・・・あれ、か・・・？」

白いボールに『吸入』と書いてある。

ロックを解除し、青白い閃光が走る。

そこから、なにやら白い機械と、管のようなものが現れた。

俗に言う『吸入機』と言つ奴だ。

「その前に、とりあえず、呼吸を安定させないと・・・ほら、ティアからこれつけて、深呼吸

「あ、ああ・・・」

なんとか走り続けた後の呼吸を正常に復帰させた三人は、蚊帳・・・

・のように見えるがただの蚊帳ではないアイテム『虫除けの壁』を四角く区切られた木にぶら下げ、その中に野宿用に用意しておいたテントを張った。もちろん、その周りにも『ゴールドスプレー』をさらに濃度を濃くし、一日一日は大丈夫と豪語されていた『プラチナスプレー』を一、三本分使用した。

「多分、これで明かりがあつても近寄れはしないと思うけど……で、これから予定だけど」

「こんなに暗いんじゃ、何も出来やしませんね」

「そうだな……」

「いやいや、それがそうでもない。システイナ、暗がりに置いて、自らの頼れる感覚は、何？」

「…………やはり、戦闘となると、気配を感じ取る第六感の類・
・・ですか？」

「そう。萌えもんは人と比べると、段違いに戦闘センスに長けている。だから、そう言う気配を感じる能力は、萌えもんバトルの必須事項の一つなんだ。で、この暗闇なら、それを育てる事も可能かな……ってわけ。どう思つ、ティア？」

「……私に振るか、そこ？」

「ごめんごめん。修行する側だからさ、ちよつと話を聞いておこうかと」

「なるほどな。そうだな……確かに、いいんじゃないか？ただ、道に迷うといけないから、何かポジショニングシステム的なものがあるといい気がするぞ」

「そうだね……あ、『ナビゲーター』に対応した発信機、確かに持つてなかつた？」

「ああ、『秘密基地』用発信機ですね？ ありましたありました」

そういうつて、システイナはバッグから黒いテレビのようなものを取り出した。

「えっと……モニターのバッテリーは大丈夫みたいですが、衛星とのリンクが切れています。だから、なるべく遠くには行かないで

くださいね

「わかつた。えつと、今の時間は・・・まだ大丈夫みたいだね。よし、ティア、出かけようか」

「うん！」

そしてミナトとティアは、百メートル程度歩いたところで、唐突に野生の『ビードル』が現れた。

薄暗い、萌えもんには見えない程度の赤を持ったライトをつけていたので、辛うじて確認できた。

「…………」

「出会い頭にそれはないでしょ？！」

「ちつ、この程度っ！」

草叢にティアが突っ込み、正面で思い切りドロップキックをかます。

「どら…………！」

「てい、ティア、そんなことができたの！？」

「当たり前だつ！」

追加攻撃、引っ搔いた。

がさがさと音がしているが、草叢の中なのでよく見えない。

「ぐつ！」

「きしやあああ！」

「くそ、このつ！」

次にティアが出てきたとき、傷だらけだった。

「はあ・・・はあ・・・」

「ティア、大丈夫？！」

「ふふ、これだけ傷ついたら・・・ミナト、回復だ！」

「わかつた！」

腕をとり、そこからジェット注射式の『傷薬』のトリガーを引く。

「そう言えば、お前の傷薬は塗るタイプじゃないんだな」

「軟膏系列の？ そんなの、一年前に生産中止。今主流なのは、このジェット注射式か、液体塗り薬（ウナなんとかの類）だつて。・・・

・オーキッド博士、よほどの変態だつたんだなあ・・・?
「や、そつなか? やつぱり」

と言つてこむと、向こうから再び仕掛けて來た。

「はあつー」

「思いつきり引っ搔いてやれー!」

ビーダルは飛びかかってきた勢いのまま、体当たり。対するティアは、爪を硬化させて、引っ搔くの体制で飛びだす。すれ違いざまに放たれた一撃は、恐らくビーダルの急所を捉えた。しかし、こさかレベルが違すぎる。この程度で倒れたりはしない・・・と言つても、体力面で既にビーダルはギリギリ立つていいれる状態。あと一撃でも喰らえば恐らく、倒れるだろ。

「よし、トドメだあ！」

地面を蹴り、正面に跳躍して『引っ搔く』。

「ひしゅ

「

と、突然何かビーダルの手から現れた。それは全ての光を反射し、神々しいまでに輝く白。

「『糸を吐く』?！」

「ちつ、このー！」

爪で引き裂くと必死で糸に触れるも、それが逆に絡みついて、手が覆われる。

「くそ、離れるー！」

勢いよく腕を振るつた所為で、勢いを自分で消してしまって、じりじりと横転。

「く・・・ー！」

立ち上がりうとしたが、地面とくつついてしまって、離れない。そしてそれを見ると、ビーダルは去つて行つてしまつた。

「く・・・ー！」

「仕方ない、と言えば仕方ないのかな・・・?」

「それより、動けん！ 何とかしな、ミナトー！」

「えっと・・・虫萌えもんの糸は、一、三分で硬化して簡単に崩れるようになるから・・・」

「その前に何とかしろ!」

「まあ、『火の粉』を覚えないことは・・・」

「ちっ・・・」

その周りには、暗闇だけがいるわけではない。

とりあえず十分程度は持つだろうとこいつと、『虫除けスプレー』を自分の身体に振ったミナト。

ティアは、まだぐしゃぐしゃと糸を掻き回し、硬化を遅らせていた。

そう、大量の虫萌えもんが、その周りにはいるのだ。

。

◀◀ T O B e N e x t S t o r y :

Third Story: 『影の森・前編』(後書き)

ここまで読んでいただいて、どうもありがとうございました。

カントーはおそらく、クチバシティで終わるかと・・・。

そこから、ジヨウト・アサギシティ辺りにについて、そこから・・・

考えてません。

それでは、またいつか。

トキワの森が野生化しちゃって、主が出てきます。
レベル差? 気にしない気にならない。
火の粉最強伝説(笑)
それでは、ゆっくりしていってね!!

Place:トキワの森

『ミナト・ティア側 トキワの森の奥』

「すう はあ 」

トキワの森で、どれほど訓練をしただろう。レベルはいまだに上昇しないが、瞬発力、機動力、それに気配を読む能力は、飛躍的な上達を見せている。

「すう はあ 見えた！」

深呼吸をして、目を瞑るティア。

「どうしたの？」

「左から一人、前から一人、右から・・・一人。戦闘体制で近付いている。郭翼陣形にしては、やけに正面突破しやすいな・・・」

「そ、そこまでわかるようになるの？」

「ん？ ああ、だんだん、気配が読めるようになってきた。正面はピカチュウ・・・左はコクーン、右はビードル・・・と言つたところか？」

指を指して、萌えもんの種類までいいあてる。

「なるほど。両翼が先に近付いて攻撃を仕掛けたところに、正面は決めに入る・・・と言つことか。いいだろう、ミナト！ 正面へ突つ込むぞ！」

「つ、わかった！」

ティアが、ただ速いだけならまだ野生の萌えもんにも勝ち目はあつただろう。

だが『撃たれ火』にその見事なフットワークが、絶対的な武器となる。

「はあっ！」

横へ跳躍、少ししゃがんで足払い。

こけさせたところで、引っ搔いて一步退く。

連續で引っ搔いていると、爪の硬化物質の分泌が追いつかなくなり、
PP（限度回数）を超えてしまう可能性がある。

「そろそろ……よし、来た！」

「ふしゅ

ビーダルの『糸を吐く』。

これを、容易くかわし、隙のできたビーダルに引っ搔いて、それの乗っていた木の上から叩き落とす。

「つらあ！」

もう一人のビーダルは、胸倉を掴んで木に叩きつけてから落とす。

「つと。よし、こい！」

「

ピカチュウが『鳴き声』を放つ。

「ふ、この程度か？ 効くわけないだろ、愚か者め」迫るティアに、ピカチュウは頬から手に移した電気で、応戦しようとする。

「気をつけて！ 『電気ショック』が……」

「私が、何度ピカチュウを倒したと思つ？」

手から指向性を持つて放たれた電撃は、確かにティアを穿つ。

「く・・・何度やられても、この技は痛いな・・・」

電撃の当たった部分をパンパンと払い、後退。

「だが・・・その分だけ、こちらが有利になる…」

くるりと回転、草の陰へ。

なにやら草叢が揺れてから、一いつの飴色の何かが飛び出た。

「当たれ！」

飴色の何かの正体は、コクーン。

一人でどうやら、ひたすら『堅くなる』をしていたようだ。

そしてそのコクーンが、ビーダルの頭に命中、両翼の四人は、倒れた。

草叢から勢いよく飛び出たティア。そして、華麗に着地。

振り向きざま、ピカチュウの『体当たり』に当たった。

勢いで間合いが広がり、ティアが少々不利な状況に置かれる。

「く・・・突っ込む！」

連続で来る『電気ショック』に田もくれず、ティアは思い切りピカチュウに飛びかかった。

「全力で・・・『引つ搔く』！」

渾身の力を込めたアッパーの『引つ搔く』は、確かにピカチュウを吹き飛ばした。

「つはあ・・・はあ・・・びつ、どうだ・・・思い知つたか・・・！」

目の前で気絶しているピカチュウ。

そして、ティアは肩で息をしている。相当、先程のダメージが大きいのだろう。

「お疲れ。どうやら、LV7になつたみたいだよ。えっと・・・まあ、特に基本ステータスに大した上昇は見られないみたい」「どうでもいいから・・・早く、治療してくれ・・・」

「う、うん」

普通はボールホルダーになつているはずのベルト。

そこは、もはやドラッグホルダーとなつている。『傷薬』や『毒消し』、『麻痺治し』等々、様々な薬剤が入つていて。

そこから一つ、『傷薬』を取り出し、ティアの腕にあててトリガーを引いた。

「ふう・・・もう少し休ませる」

「ん」

「そう言えば、僕つてティアに『ありがと』って言われたこと、ないよね・・・」

頭の中で呟いているつもりが、ふと、口に出たようだ。

「・・・トレーナーが萌えもんを助けるのは、当然だらうへ」

「・・・・・声に出てた？」

「ああ。癖なんじやないか？・・・まあ、お前が私と対等な立場

で話せるようになれば、礼を言つてやらんこともない・・・が。無理だらうな、所詮ミナトだ。それは無理だらうな

「なつ、そんなことないつて・・・！ 第一、立場的に言えば・・・

僕が上なんぢやないの？！」

「・・・どうだか。そういううどいが、『所詮ミナト』なんだ。私の言つていることの真意がわからないのなら、わかるまで放置だ」「つ・・・わ、わかりません教えてくださいお願ひします」

土下座してミナトはティアに真意を問う。

「謙つて、というわけでもない。まあ、解らんだらうな、お前にはしかし、それをティアは軽くあしらう。

「まだ、解らなくともいい。それを知る日が、必ず訪れる」あくまで教える気はないらしい。だが、それは解るものだという。それを解せないミナト。なにやら腑に落ちないらしいが、それを飲み込むしかないと割り切つたようだ。

「・・・解るんだつたら、いいさ」

「ふ・・・・・・來たぞ、左！ トランセルが四人、『堅くなる』が持続した状態で突つ込んできた！

「よし・・・行こう、ティア！」

「応！」

（こんなところだけ・・・無意識なのか？ それとも・・・前の恋人の癖なのか・・・何にしても、こいつなら私の真意、理解することができるそうだ・・・。選んで正解・・・か！）

飛び出すのは、一人同時。

どちらともなく歩み始め、その地を蹴つて。

その姿は、三年前の『フレイア』との姿を思い出させるものだったのは、当の本人達すらわからることはなかつた。

『システム側 トキワの森・ミナト達のキャンプ』

『虫除けの壁』・・・萌えもん達が近寄れないように、スプレーの成分を纖維に染み込ませた蚊帳の中に、氷神『スイクン』であるシ

ステイナはいた。

「…………寄らば、斬る…………おとなしくそこでじつと
していなさい」

殺氣を放ち、周りににじり寄る虫萌えもん達を威嚇する。

（この数なら、充分『吹雪』と『オーロラビーム』で充分なんだが。
・まあ、余計な体力は使わないに越したことはないし・・・）

ステイナも、じゅやら多少気配が読めるらしい。

「えと、マスターは今どの辺に・・・」

ディスプレイを見たステイナは、驚愕した。

「つ、どうこうこと?!

反応が、ない。半径300メートル以上の外へ、出て行つたとい
うのか。

（そんな馬鹿な・・・ここは広くて40万平方メートル・・・考え
られる理由は、恐らく・・・ここが、森の中心地である・・・って
こと・・・? だとしたら、森の主が・・・縄張り荒らしである
マスターに報復をしかけてくる可能性があるー）

『萌えもんギア』を取り出し、連絡をとる。

「マスター!」

『システム? どうかしたの、そんなに慌てて・・・?』

『ミナト・ティア側 トキワの森の奥』

「システム? どうしたの、そんなに慌てて・・・?」

「どうかしたのか? システイナに何か・・・?」

「それが、ずいぶん慌てた様子で・・・」

『マスター! このキャンプは、じゅやらの森の中心・・・主の
住処だったと思われます! 恐らく、報復に訪れる可能性がありま
す! すぐにお戻りを!』

「な、なんだつて? ! ち、しくつた・・・ティア、すぐに戻ろつ

!」

「どうしたんだ?」

「」の森の主・・・リーダーの萌えもんが、僕らに住処をとられた腹いせに、仕返しに来るかもしないんだ！ おそらく、この野生同然の森に、主がいてもおかしくはない・・・！」

「今の私じゃ、到底太刀打ちできない・・・ってことだろ？」「

「そう。ほら、掴まつて！」

「私のスピードを甘く見るなよ？」「

「じゃなくて、僕が追いつけないって！」「

「・・・仕方ないな。ほら、後ろ向け。肩車する」「

ミナトは後ろを向き、少ししゃがむ。

そして、ティアが軽く跳躍してミナトの首に掴まる。

「ほら行け！ 主が現れる前に少しでもシスティナのとこに帰るぞ！」

「はいはい、しつかり・・・僕の頭がつぶれない程度に掴まつててよー！」

「おう！」

全速疾走、自分の来た方向を一直線にミナトは戻った。

（間に合え、間に合え、間に合え・・・システィナが、一番危ない！…）

襲い来る萌えもん達にも目をくれず、ミナトは走った。

システィナは、監視で疲労した精神を、取り敢えず気合を入れなおすことで補填。主の来訪を構えた。

「つはあ・・・はあ・・・システィナ、大丈夫？！」「

ミナトとティア、キャンプへ到着。

ティアはミナトの肩から降り、ミナトは膝をついて肩で息をしている。

「ま、マスター！ マスターこそ大丈夫なんですか？！」「

「はあ、はあ・・・つ僕は大丈夫・・・主は、まだ、現れてない？！」「

「え、あ、はい。まだ、来ていませんが・・・」

「よかつた・・・

安堵からか、突然ミナトは倒れてしまった。

「あ・・・・マスター？！」

「安心しろ、こいつ寝てるだけだ。大したことはない」

「そう・・・・。じゃあ、テントに運び込もうか」

「そうだな。ただ・・・・私は身長が足りないんだが」

ティアは、自分を指差して言つ。

「・・・・私が逆お姫様抱つこで運ぶ必要があるのね・・・・」

そしてミナトを抱えて、少し『しゅん』としてシステムナはテントに入つていつた。

次にミナトが起きたとき、事態は・・・あまり変わっていなかつた。依然警戒状態にあるシステムナとティア。

一ミコ一ミコ距離を縮めてきた野生の萌えもん達。

「・・・・・・鬱陶しいな・・・・そろそろボールを換えるべきかな」といつて、各『虫除けの壁』の四隅についていた球体を青いものから黒いものへ取り替えた。

「マスター、何か違うのですか？」

「ん。えっとね・・・・ほら、見てよ。野生の萌えもん、退いて行くでしょ？ これが、網から霧散してた成分の発生源なんだ。これを換えると、効果が持続するんだ」

ミナトの言う通り、かさかさと退いて行く野生の萌えもん達。

その中で一人、取り残されて苦しそうにもがく者が。

「あ・・・・ちょっと行って来る。あのこ、助けてこなきや」

「・・・・・・マスターらしいですね、現在敵である『トキワの森』の野生を助けるなんて」

（つ・・・・何故ここまでしていく、私と対等な立場でいてくれないんだ？ やつぱり、こいつもどこかの賢治（『銀河鉄道の夜』的な意味で）のようだ、上から目線で・・・奴らを助けているだけなんか・・・？）

蚊帳から出て、息も絶え絶え、喉を押さえて苦しそうにもがいているトランセルを、ミナトは抱き上げて効果範囲外へ連れて行った。「無抵抗の君たちに手を出す気はないんだけど……今は、この子に興味はない。取り敢えず、返す」

そう言つて、ミナトはトランセルを地面に置いて戻つて行つた。

「よし、行こうか

「え？」

「マスター、危険です。敵の縄張りに無謀にも近付こうなど……今は、ここでじつとしているのが得策かと思いますが」

「この森へ入った目的は、『ティアの訓練』だから。少なくとも、『火の粉』は使えないと『タケシ』には勝てない……その先、『御月見岳』だつてキツイ。当然の如し『カスミ』にだつて、勝てるわけがない。ここで、少しは鍛えておかないと……主が、倒せるくらいは」

少々飛んだ発言をしたミナトに、システィナは反論した。
「マスター！ 今のティアのレベルは、10にも満たないんですよ？」 そんなので、ここの中が倒せるわけ……」

「ティアの今の運動能力、反射能力、気配察知……それと、僕とティアの連携策があれば、きっと大丈夫だよ。ね、ティア」
しかし、それもあっけなく言いくるめられてしまつた。

そしてティアが、少し嬉しそうなのは気にしない気にしない。
「え、えっと……そうか？ まあ、お前がそう言つんなら、そつかもしれないが……」

「というわけで、行つて来るよ……留守、任せたよ、システィナ」

「…………しようがないですね。行つてらっしゃいませ、マスター。この陣の護り、お任せください」

「じゃあな、システィナ！ お前も気をつけてな！」

と言つて、一人で外へ出かけて行つた。

「まったく、あの二人は……仕方ないんだから。……さつきと

同じよ。寄つたら、凍る」とになるから

『ティア・ミナト側 トキワの森・キャンプ近辺』
ティアとミナトが外に出てからと言つもの、攻撃は激しくなるばかり。

傷薬を一度戦闘が終わるたびにつけないといけなくなり、非常に危険な状態。

「はあ・・・はあ・・・どう、だ？ 攻撃力は、上がったか・・・

？」

「・・・40。レベル20台の萌えもんのステータスだよ。ほんと、

バケモノ並だね」

「ふ・・・」の森の主に勝つために、レベルを上げないといけない

だろう？」

振り向いて、ティアは笑つてみせる。

「もうレベルは9・・・そろそろ、兆候が見えてくるはずだよ

「ん・・・？ 兆、候？ 一体・・・」

と、ティアが言いかけたときに、その兆候は起きた。突然、ティアが両腕を押さえ、しゃがみ込んだのだ。

「くうう・・・つ、たあああ・・・」

「てい、ティア？！ 大丈夫？！」

少々、うろたえたミナト。

「いたあ・・・つ、ああつ！」

「なつ？！」

それは、発現であり、開花。

痛みを忘れ、熱さもなく、それは訪れた。

「はああつ！」

腕にあつた、紅蓮の炎は手に収束。

目の前には、ノーマルタイプの萌えもん・一ドラン（ ）。

こちらを睨み、戦闘は既に始まっているといわんばかりに構えていた。

「行くぞ・・・私の、本領・・・炎を！－！」

にひと笑ひ、両手・・・ニヤ、それに萃まつた炎を、ニギハ（ ）に向け。

「つてええええええい！！」

放たれたその炎は、草をピンポイントで焦がし、突き抜け、交わす暇もなく二ドラン（ ）を穿つた。

『火の粉』……習得！ どうだ、ミナト！ 驚いたか！』

す ご い よ

「ふふ、もつと崇めやう。」

威張るティア。まんざら『気分は悪くなさそつだ。

「……ラン（ ）、まだ戦れるみたいだよ？」

しかし、まだ彼は立ち上がることができた。

「ふう。片手で『火の粉』出せる?」

「ああ。」ツは覚えた。

だったら……と指を立

「放たずに、手に纏つた状態で思い切り殴つてみなよ。

の反動慣れしてるから、腕力はかなり強いと思うよ」

「……………」やつてあるかねせあるたれ

ティアは向き直り、ニドラン（ ）を睨む。

「ジラン（ ）も同じ。しかし、多少離れている所為か、二ドラ

「まあまあ、か殺氣

どこからか現れた紅蓮の炎を、ティアは手に纏わせ、普段『引っ搔く』を使う構えに入つた。

言葉を知らぬ野生の一ヒドラン()。頭頂部の棘を、ティアに向

けて突進してきた。

「ティア、『乱れ突き』が来る！」

「くそっ、正面衝突はいやだぞ？！」

「直前で回転してかわして！」

「タイミングがシビアなんだがな……つ、とっ！」

見事な回転回避。

背後に周り、思い切り手を広げ、零距離で『火の粉』を放つた。両手に、連續で。

「つこのおおおおーー！」

そして、ニードラン（）は氣絶、ティアは勝利を収めた。

「ミナト……腕に纏わせるだけでは、どうやら効果を発しないらしい。放つ意思を持つてこそ、これは『火の粉』として発現するみたいだぞ」

「へえ……氣付かなかつた。まだ、僕も知識不足だなあ……」

「それより、PPを回復してくれ。『火の粉』の限度数が尽きそうだ。それに、『引っ搔く』はだいぶ前からキツイ状態なんだ」

「もう氣絶してる相手に、十発近く無駄球撃つからだよ……」

ベルトから、『ペーペーマックス』を取り出し、ティアの腕でトリ

ガーを引いた。

「無駄ではないぞ。ちゃんと覚えたしな」

軽く腕をふって、ティアは答える。

「さて……そろそろ……来るんじゃないかな……？」

「……感じるか？」

「いいや。トレーナーの勘、つてところかな。これだけ大量の手下を倒されたんだ、ただで放つておくわけがない。……言っておくけど、今の君とこの森の主じや、確實に体力・防御力で見劣りしている。その点を考えると、攻撃はかわすのが基本になる。で、体当たりで木にぶつけさせたり、コンマ何秒の紙一重でかわして後頭部を叩くとかしてわざと体力を削らないと、負けちゃう

「わかっている。『火の粉』と『引っ搔く』が同時にできればいい

「『ダブルスキル』？ 少なくとも50は超えないと……」

「『ダブルスキル』？ 少なくとも50は超えないと……」
と、言葉を切り、ミナトは横に避けた。

「お前……？ 私の縄張りを荒らしたのは……。こんな、貧弱

そうな人間とヒトカゲごとに……」

「この森の主、だね？」

「いかにも。私はこの森の女王……『ネール』……『闇の電鼠』^{でんそ}とは私のこと」

木の上から降りてきたのは、一人のピカチュウ。ただ、相当場数を踏んでいるのか、かなりの気迫を感じる。

「……誰だっけ？」

ミナトは気にしない。この程度の気配なら、四天王の手持ちにゴロゴロしているからだ。

「カントーの『野生萌えもんの拠点』の支配者……『闇の電鼠』『蓬莱の姫姫』『岩山の魔龍』『無頼の雷帝』『地底の掘削王』『魔窟の氷公』『焰神』^{ほむらのかみ}の六人の内、一人は聞いた事、あるだろ？』
「……『無頼の雷帝』サンダー、『魔窟の氷公』フリーザー、『焰神』ファイヤー。その三人だけなら、聞いたことがあるけど……」「ジムと同じようなものだ。私を負かせれば、この『森の証』を渡そう。出てくる野性萌えもんのレベルレートが少々上がるという代物だ」

と言つて取り出したのは、バッジのような何か。緑色の光を放つている。

「まあ、私を捕まえようとしてもいいぞ？ それでも、これはやる
「別に、もうピカチュウは家にいるしね」

『麻痺治し』のトリガー・ロックを外し、臨戦態勢に入る。

「そうか。お前ほどの器の人間だ、私もついて行きたいところだが・
・ それでは、散つて行つた他の者に示しがつかん。・ 行くぞ
！」

ひゅ

。

『引つ搔く』を、ミナトは紙一重でかわす。

暗闇の中、視界は非常に悪いが、ピカチュウの類の持つ電気袋……そこに蓄積された電気の光が、ネールの居場所を教える。

「ティア、見えるよね」

「ああ」

「じゃあ、戦おう」

「応」

ネールの背後、一瞬紅く光ったかと思えば、ティアは『火の粉』を放つ。

見事命中、吹き飛んだネールは、倒れることなく立つ。

「つ、この視界の悪さを逆手にとったか……だが！」

そのまま飛びかかり、鋭い爪をティアに向かつて振りかざした。

振り下ろされた腕は、確かにティアが咄嗟に身を庇つて構えた腕を切り裂く。

「く・・・思つたより深くない。大丈夫みたいだ」

「服が……」

「気にするな、換えは持つている」

ティアは一步退く。

「しかし・・・予想より少ないとは言え痛いのは事実。多少攻撃を落とす必要があるか・・・」

「くく、そうかしらね・・・?」

「ふん・・・挑発の仕方、間違えていいなか?・・・

「!」

ティアは、『鳴き声』で応戦、ダメージを軽減する。

「ふふ、ふ・・・そろそろかしら・・・つはは!」

「ん? どうした・・・・・・つく!」

倒れた・・・わけではないが、腕をおさえて、屈みこんだティア。かが
急に、息も荒くなつた。

「はあ・・・く、くそ・・・つ、何、だ・・・体が・・・うごか、

な・・・

「でしょうっ！ っはははア！ 私たちピカチュウの特性『静電気』を、まともに攻撃されてなかつたから知らなかつたんでしょう？！」

「へへ、はははははっ！」

嗜虐的な快感を貪り、抱腹して笑つてゐるネール。

「・・・ティア！」

ミナトが走りティアに近付こうとする。

「だあ め」

目の前に突然、ネールが現れてミナトを引っ搔こうとする。

「その子は、ちや んと料理してあげるから。近付いちやア・・・駄目だよ！」

「邪魔だッ！！」

しかしミナト、無視。頬を裏拳で殴り、吹き飛ばす。

身長はティアとさう変わらず、跳躍でミナトの目の前に立ち塞がつていたネールは、ゴロゴロと地を転がつた。

「ぐ、はあ・・・つ、コイツ・・・！」

「・・・動くな・・・」

ネールを見たその眼は、確かに『動けば迷わず、この手で突き殺す』と言つていた。

「！！」

急激な吐き気を催す殺氣をぶつけられ、動くことが叶わなかつたネール。

ぐ、と呻きを漏らして構えたまま静止。

「ティア、大丈夫・・・？」

「なわけないだろ・・・ボケが・・・ひっさとやれ」

『麻痺治し』と『傷薬』、二つの薬を順に投げ

傷はみるみるうちに塞がり、身体も自由に動くようになった。

「よし・・・つと。さて、行くか！」

「まつて。『麻痺免疫』がそんなに強くないから、なるべくかわすのがベストだつて事を忘れないで

「わかつてる」

ひらひらと舞う袖が邪魔と思つたのか、ティアは引き裂いた。
そして、前へと跳躍。

硬化した爪を持つその手で手刀を作り、思い切り突く。
ネールはそれをかわし、『体当たり』。

しかしそれを、ティアは爪を立てて手で受けた。

「つたいたな・・・なにすんの！」

「知らん！ 私は、最善策をとつたまで！」

勢いを殺しきれず、後ろへ跳ぶ。

「つこの！」

追撃へと転じたネール。

前進、そしてオーバーヘッジキック。

それをなんとかくるりと回転してかわし、足を掴んで投げる。

木にぶつかり、草叢の陰に隠れた。

「つはああ！」

高く飛び、『火の粉』を放つ。

草叢を焼き、ネールの居場所を顕にした。

地面に降りた時は既にネールは下にいる。

予想したティアは、腕に『火の粉』を纏わせて構えた。

「はああああ！」

と、まあ、意気込んだのはいいが、ネールがそこに突っ込むわけはない。

『電光石火』でちょうど落ちる直前に突進。

ティアが腕で庇い、吹き飛ぶ。

腕の炎はまだ健在。

木が背後に迫る。

それを足で蹴り、正面へ跳躍。

再び『電光石火』でネールがティアに突っ込む。

ティアは腕を構え、紅蓮の炎を手に纏わせ、備える。
ネールはそのスピードで一気に押すつもりだ。

「その程度、か？　お前の、実力」

「どういふこと？」

「わかるさ、すぐに」

くるり、と空中で回転、ネールの『電光石火』を避ける。

そして手がネールに近付く絶妙のタイミングで両手の『火の粉』を放ち、脇腹に一、三発命中させた。

「がつ・・・・！」

「な？　わかつただろ？」

倒れて転がるネール。

対し、華麗に立つティア。

振り向き、跳躍し、追撃。

『引っ搔く』の体制で、ネールの胸部を裂いた。

「ぐ、はあ・・・つ！…」

そして、渾身の『火の粉』。

鳩尾に火球をぶつける。

「つ、く・・・・・・う」

ネールが、傷口を守るようにして仰向けに倒れた。

「勝つ・・・た・・・？」

「くつ・・・確かに、貴女の・・・勝ちよ。ほら、私の胸についてる『森の証』・・・持つて行きなさい」

「・・・・・ネール、と言つたね。ちょっと待つてて」

ミナトが、ホルダーから桃色の『カートリッジ』を取り出し、ネールの腕にてる。

「な、何・・・？」

「動かないで。変なところに入ると、痛いなんてものじやないから」

「・・・・・」

「一応、火傷してゐる可能性もあるから。『回復薬』^{かいふくのくすり}を処方しようと」

トリガーを引き、再びホルダーに戻した。

「何故、敵である私に・・・そんな事を？」

腕に違和感があるのか、薬をあてたところを揉んでいる。

「昨日の敵は今日の友……って言葉、知らない？ 僕は、ただ単に怪我してる子を助けただけ」

「…………そう、か……。ありがとう、礼を言つよ」
「そんな、感謝されるほどの、ことなんて……」

そしておもむろに、ティアが近付いてきた。

「大丈夫だ。お前は、十分感謝に値する事をしている」

「つ、と。ティア、君にも『傷薬』を……」

と言つて、ミナトは『傷薬』をティアにあてる。

「君は僕の大事なパートナーだからね……つ、あ！」
(気付いた、か。やつと……つぐづぐ鈍感な奴……)

ティアが、ミナトの手をとり、握る。

「『対等な立場で話す』の意味、わかつたか？」

「……ん。わかつた気がする……というか、思い出した。……
……フレイアが死んでから、こんな感情は持つてなかつたな……
萌えもんを、『僕らと同じ』っていう概念を持つて接するなんて」
そして、ミナトは、その手を握り返した。

「やっぱり、前のパートナーの傷は、深いみたいだな……」
「癒える事のない業……つて感じだから……つて、こんな辛氣臭い話はおいといて、行こう。早くシスティナ拾つて、『鈍鉛市』に行かないと」

「初の対人戦、だな！ よーし。待つてろ、一二ビジム！！」

ティアが、空を指差し、なにやら叫んでいる。

そしてミナトが、さくさく進んでいるのを見て、

「ああ、待て、ミナト！ 置いてくな、さもないと置いてくぞ……」
走つて追いかけ始めた。

B
e
N
e
x
t

S
t
o
r
y
.
..

<
<
T
o

次は、レベル10でタケシとかやつてみます。
レベル差・・・? ふん、戦略で何とかなる!!
いや、何とかする!!
と言つわけで、次もお付き合いいただけると嬉しいです。

すいません、更新が遅れました。

今回は、タケシと戦います。負けます。

あ、後、スルーしてオツキミやまに行きます。

それでは、ゆっくりしていってね！！

Fifth Story:『大地を知る者・前編』

Place: 鈍鉛市^{「ビシティ}

「さて・・・久しぶりのジムだなあ・・・」

「対人戦の腕は落ちてませんか、マスター？」

「なつ、何だと？！ だとしたら、私はどうすれば・・・」

「心配無用。絶対、一人で勝つてみせよう」

「・・・応」

二ビシティ。家の瓦が普通より少し白く、灰色であることが密かに噂される街。

トキワの森から（方位磁針を使って）抜け、萌えもんせんたであ一日休息をとったミニートとティアとシスティナは、ティアに対人戦の心得を授けるために、この街のジムリーダー『タケシ』（本名は萌えもんリーグの処置により個人情報漏洩を避ける為に伏せられる）と戦いに来たのであった。

「さて・・・このレベルで勝てるかは謎だけど・・・」

「ふん、知るか！ 私は、常に全力で戦うだけだっ！」

「・・・まあ、なんていうか、ティア、やけにテンション高いねえ・・・？」

「当然！ なんと言つても、初の対人戦だからな！」

「マスター、いざとなればこの私が戦わせていただきます」

「・・・ううん、いい。そんなのじゃ、ティアが成長しないでしょ」

「そう、ですね。・・・マスター」

「ん？」

「奥様の件から、ずいぶん立ち直られたのではないですか？ 以前

なら、勝つことだけが目的の勝負しか、なさらなかつたのに」

「・・・そうかな？ 実感、ないよ」

「一ビジムの自動ドアが開き、中へと歩む。

「やあ。ミナト、オーキド博士から話は聞いているよ。真剣勝負の邪魔にならないように、ジムトレーナーは休ませておいた」黒めの肌。オレンジのシャツに、緑のベスト。・・・格好は、体躯の細い山男と言つたところ。

彼こそ、この一ビジムのジムリーダー『タケシ』。岩タイプの萌えもんを好んで扱う、人呼んで『大地を知る者』。

「それに、今回は比較的弱めの萌えもんを用意しておいたよ。それでも、君の萌えもんが太刀打ち出来るか謎だけね」

「・・・ミナト。今回の作戦は?」

「始まつてから考える」

「コイツ、手持ちに五人いるぞ。それに、全員私の倍程度のレベル持ちだ」

「つて言うと・・・20～25と考えるのが妥当・・・よし、タケシ、やつてやる!」

「望むところ!・・・とその前にジムジャッジを呼ばないと。マツオカをーん」

ジムジャッジ・・・そのジム専属の、萌えもん勝負の審判。

戦闘不能、麻痺、毒、クリティカル判定などなど・・・一切の判断は彼にかかりっている。

タケシが、軽くその『マツオカ』といつジャッジを呼ぶと、

「やつと、仕事か！」

「五月蠅いな、こいつ」

「仕方ない仕方ない。ジムジャッジは、声もそれなりでないと駄目だし」

「よーし、早速行くぞ! 一ビシティ萌えもんトレーニングジム、勝ち抜き方式萌えもんバトル! アウエイサイド、ミナト! 所持萌えもん数、2!」

「あ、システムは戦闘に出さないから、1で」

「了解! 訂正、ミナト所持萌えもん数、1! ホームサイド、ニ

ビジムリーダー、タケシ！所持萌えもん数、5！「

「ティアの言つた事、当たつたね」

「両者、萌えもんリリース！」

「ティア、サポートは任せて」

「応、任せた！」

ティアが前へ出る。

対するタケシは、ベルトのホルダーからもんすたあぼーるを一つ取り出し、

「手加減なしだ、行け、オムスター！」

青い服、薄く金に輝く髪、その背中には身体ほどあらうかという巻貝。

「」の日のために、オムナイトから無理矢理進化した・・・！ ご主人の期待を裏切らぬため、ここで一度、朽ちてもらおう！

「私も、ミナトの期待を裏切るわけにはいかない。お前には悪いが、勝たせてもらう！」

「・・・・・アーコーレディ？」

「セット！」

オムナイトがまず準備完了を継げ、

「レディ！」

ティアがそれに続いた。

「決闘・・・開始！」

「らあつ！」

「先手必勝！」

ほぼ同時に飛びだし、まず始めに放つた技は。

「ティア、『引っ搔く！』」

「オムスター、『噛み付く！』」

非常に物理的相性、悪し。

ティアは爪を立て、腕を振るう。

それにはオムスターは、思い切り噛み付く。

「ついたたあ！」

「がじがじがじ」

「噛むな噛むな！！」

無理矢理振りほどいた。

爪を立てておいたのが幸いか、それほど傷は『えられなかつたようだ。

出血もまだ安全範囲内。

しかしそれは相手も同じこと。

多少口の中を切つてはいるものの、目立つた傷はない。

「く・・・『火の粉』も無理として・・・」

「追加攻撃、オムスター、『トゲキヤノン！』」

オムスターの腕の鎧殻がいかくについている棘が、飛びだした。

・・・それも、連続で。

「つく・・・！」

腕で庇うが、ティアの服には装甲の一つも為されていない。刺さる棘が、ティアに激痛を送る。

「ティア！」

「ご主人、P.P.が一回分切れたみたいです」

「怯んでいる間に、追加攻撃だ！」

「ちつ、ティア、火の粉！」

腕からの火炎で、オムスターにぶつけた。ついでに、棘も掃う。

鎧殻で護られているオムスターにはほとんど効いていないようだ。

「私の鎧は、水／岩タイプ。炎が効くわけないでしょ？」

「くそ、このつ・・・」

「ちょっと、ティア！」

「何だつ？！」

「こつち来て！」

一步引き、ミナトの傍に寄る。

ミナトが、『傷薬』をあてる。

そして、耳元で

「肌の出でているところを狙つて『引っ搔く』、それまではできる限り『鳴き声』で対応」

「了解」

「なるべく背後に回つて、攻撃は回避が基本」

「わかった」

「作戦は以上！」

「つしゃあ！！」

「跳躍、オムスターの真正面に突つ込む。

「つ、何のつもり？！」

腕を振り、棘をぶつける。

それをしゃがんで回避、背後に回転して入り込む。

「な？！」

足払いでのバランスを崩して、右手の手刀で首元を弾き、左手でオムスターの腕の甲殻をはがした。

「つ、たあ！！」

首元を殴られて意識が混濁している間に、背中の殻の及んでいないところを引っ搔く。

そして蹴り、壁にあてる。

「このまま一気に攻める！！」

「チツ・・・・そうはいくか、オムスター！　『波乗り』！」

「はつ・・・・く・・・・」

立ち上がり、地面を蹴る。

空へと跳躍し、今度は壁を蹴る。

「な、何をするつもり

「ティア、跳んで！！」

「！・・・・わ、わかった！」

ミナトの指示に従い、空中へと飛ぶ。

オムスターが地面に立ち、床にひびが入る。

「はああああ！！」

だんつ、と再び跳ぶが、今度は後に水が湧いている。

「そ、そんな馬鹿な！」

「オムスターを踏んで、降りて！」

降下を始めていたティアは、無理矢理身体をひねつてオムスターの頭を蹴つて逃げた。

ついでに背後からサマーソルトキックを喰らわせて、地面に降り立つた。

オムスターは踏まれた衝撃と蹴りの効果で、受身もとれず地面に落ちる。

木ノ又タニ!

—

倒れたままのオムスターを見て、マツオカが
「オムスター、ダカノ！ タアハ、次の茆もらはせ？！」

「ノルマ」の「ノルマ」

ボールから赤い閃光が奔り、オムスターを包み、消した。ボールからの出し入れはほとんどこの形式で行われているらしいが、ボールを使わず、数多の萌えもんを忠誠で手にしてきたミナトは、それによく知らない。

次に出してきた萌えもんは、三角座りの土色の萌えもん。

行け
力へ
空飛はしてやれー!

卷之三

返事がない。たたの屍……ではない。生きていね。

「…
…
…
…
まああ
！」

ティア、爪で切りかかる

• • • • •

カブトの身体から、なにやら冷たい風が巻き起こる。

『ル・ミ・ユ・ル』

吹き飛ばされ、間合いか開く。

氷の粒すら錯覚しそうなその冷氣に、ティアの体力は「」とぐ奪われた。

- 1 -

風がやみ、ティアの意識は朦朧としている。

物語の世界

「勝った！」

え・・・?

ノリタケノコ

細が春園の聲で、その艶か、熱い

「つんな！？」

まどもに受けた。ティアが立てしなくなるはすかなし
ティアは倒れ、水の勢いに目を回して気絶した。

ゲームセット

「え、いいや・・・賞金として所持金半分は・・・ポケットマネー

金華縣志

「十円くらい、箱にあげる」

ぴん、とコインツでタケシに十円玉を差し出し、ティアを抱えて歩き出した。

云
行
九

「落ち込んでませんか？」マスター

「アーニー？」

「今まで、西とんど負けたことなんてなかつたでしょ。」

「僕はそんなにやわじやないって。タケシに負けたぐらいで落ち込んだりしないよ」

「……無理は、しないでくださいね」

「……わかつて。ちょっと悔しいくらいだから」

しばらく氣絶したままのティア。

萌えもんせんたあで体力を回復、中で休んでいた。もちろん、システムナとミナトがついて診ている。

「ずっと……氣を失つたままだね」

「大丈夫ですよ。奥様のようなことは、きっとありませんから」

「まあ、それはわかつてるけどさ……」

と、そんな感じの雑談をかわしている矢先。

『ナビゲーター』に、連絡が入った。

「えつと……あー、オーキドだ……」

「でないんですか？」

「やつぱしでなくちゃいけないよね……？」

ぼやきつつ、ミナトは応対した。

「何の用？」

『おお、ミナト。少々話したいことがあつてな』

『長い話だつたら、切るよ』

『ティアのことだつたら？』

「……聞かせてもらおつか」

『そうこのなくては。……そもそもティアは、わしがホウエンで拾つてきたのだ。赤い服の悪そうな奴に追われていたところを、な』

『ホウエン……？ ヒトカゲは、たしか……』

『うむ、カントーの、ごく一部でのみ生息しているはずだろ？』

疑問に思つたわしは、家を尋ねたのだ。そして得た答えが、『親が青い服の連中に殺され、捕獲しようと赤い連中も現れて、おまけに珍しがつてトレーナーも寄つてくる。追従を逃れていたところでわしと出会つた』といつ……まあ、ありきたりと言えばありきたり

な過去だつたのだ』

「親のリザードンもビービーしてホウエンなんかに移住したのかな……？」

『わしもやう思つたのだが、原因は不明のままだつた。……あと、ティアの名前のことだが……』

「ティア・アトカーシャ。あれは、確実に『ロストシティ』の王家『アトカーシャ家』の黄金時代の王女『ティリア・アトカーシャ』をもじつてゐよね』

『わしもそう思つ。実は、わしは一度、ティアを『ロストシティ』に連れていったことがあつてな。そのときに、自分で自分を命名したのだ』

「え・・・ そうだつたのか・・・ 知らなかつた』

『それもまあ当然だらうな。あいつ、自分の過去は中々話さんからな。・・・ そろそろわしは時間だ。それでは、またな』

「うん」

『ナビゲーター』の通信を切断し、ティアを覗く。

「聞いてた？ システイナ」

「はい。まさか、ティアにあんな過去があるなんて知りませんでした」

「まあ・・・ あの言動から、何となく想像はついたけど、まさかあの名前は自分でつけたなんてね・・・ 」

「ティリアは、非常に気高く誇り高く、強く正しい心の持ち主だつたと聞きます。・・・ ティアは、きっとそなりたかつたのではないでしようか」

「正しい心・・・ ねえ。『自分の正義を信じることが出来る心』つていうのが、僕は『正しい心』だと思つんだよね・・・ 」 ティア、そうなれてるのかな？」

ティアの頬に、ミナトが触れる。

「んう・・・ 」と呟き、ティアの手がミナトの手に触れた。その手は温かく、ミナトに『何か』を気付かせた。

「・・・・・勝つ」とは、重要じゃない・・・か。僕が吐く台詞
じゃないよね・・・」

「でも、少し前までのマスターに、奥様はきつとそう仰ると思いま
す。『勝つことより、戦つて何かを得られたかが、重要なんだ』と・
・・」

「そ、う・・・かな。フレイアがいなくなつてから何か欠けたみたい
な・・・ううん。確かに、僕の中で『フレイア』って存在がかけて
た。・・・あの榊サカキとか言う愚か者の所為で・・・僕は、いろんなも
のを失つた。フレイアを、メアリーを、ディズを・・・」

「レディ・ボトムとヴァンも忘れないであげてくださいね」

「うん。だから・・・あの時から、僕は『勝つこと』で・・・何か
を埋めようとしてたんだ・・・」

「今は、違いますよね。・・・でも、どうして?」

「わかんない。この子が来てから、いろいろ変わってきた。
感謝、しなくちゃね」

「はい。私も、今のマスター、前より好きです」

「・・・・・さり気ない告白しても、駄目なものは駄目だからね」

「・・・やつぱりですか。奥様が後を引いてるんですよね・・・」

「当然でしょ」

ティアが昼過ぎに田を覚まし、昼食を求めてきた。

「腹が減つた! ロッペパンを要求する!」

「どこで覚えたの? そんなマイナーなネタ

「ネタではない! 私は、苺ジャムとマーガリンをぬつたロッペパンが好きなんだ!」

「・・・・・仕方ない。ちょっと買って来る」

「今、ポケットマネーがないんじゃ?」

「あー・・・ちょっと待つて。窓口は・・・・・『いいじゃないな
あ』

「その辺のトレーナーから賞金稼いで来ては?」

「だめ。この辺、もうまともにバトルしてくれる人いなくなつたし、その通り、今この『ビシティ』では2番道路の開通により野生化した森を恐れ、虫取り少年が激減し、塾生徒が激増している。

そして、塾帰りの時間は夕～夜にかけてなので、当然その時間にまともに萌えもんバトルを受ける者もなく・・・という、2番道路開通が生み出した複雑の影響により、ニビ近辺の萌えもんバトル発生数が急激に減少しているのだ。

今、『元』虫取り少年達は萌えもん塾の時間なので萌えもんバトルは当然なし。

「そうでしたね・・・どうしましょうか？」

「確かに御月見山オツキミヤマに僕の別荘があつたつけ。そこなら、確か屋敷への転送機があつたはずだけど」

六年前（『赤』時代）にワープする床がロケット団の手により完成、シルフカンパニーに実装された。

そのテクノロジーは未だに健在で、シルフ程度の建物は自由に行き来可能。

さらに長距離間の転送機にそのシステムが導入され、より安定・確実な転送が実現された。

ミナトの家・・・世界屈指の屋敷もそれを使用、各別荘（大きさは普通の家程度）間の転移に使われた。

「え・・・でも、出現率が上がつてるんじゃ？ その・・・『森の証』とかいうバッジの所為で」

「確かに・・・それに、ネールの言つてた『蓬萊の妖姫』っていう萌えもんもちょっと怖いし・・・」

「だが、行かないと所持金がひどいんだろ？？」

「ん・・・そうだけど」

「コツペパンが買えないだろ？ 早く行くぞ」

ティアがミナトのジーンズを引っ張り、催促する。

「如何致しましょうか？」

「むむ・・・そうだねえ。どうしちみち僕も携帯食糧だけじゃ

やつてけないし、口座から引き落とすか

「家にありましたよね」

「・・・・・だから帰るんだけど」

「あ、そ、そうでしたね。はは・・・」

ティアを抱え、システィナを従えて、ミナトは萌えもんせんたあを
後にした。

勝つ術を見出す鍵は・・・そつ、御月見岳にある。

O B e N e x t S t o r y :

◀◀T

ここまで読んでくれた人、ありがとうございます。
次の更新は・・・いつになるでしょうね？
わかりませんが、続きをお付き合いいただけるとうれしいですね・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7953e/>

萌えっ娘もんすたあ～ある最強のトレーナーの場合～

2010年10月21日01時27分発行